

# 「体育あそび」を用いた多世代間コミュニケーションの実践

## —小学生との活動を通じた大学生の意識調査—

斎藤 晃一（東海大学大学院情報通信学研究科） 村松 香織（東海大学高輪教養教育センター）

Intergenerational Communication through “Children’s Physical Play”:  
University students’ awareness through interaction with elementary school students

Koichi SAITO Kaori MURAMATSU

### Abstract

Our practical research conducted a subjective-opinions survey of university students to collect basic data on intergenerational communication as promoted by “Children’s Physical Play” in a practice-oriented curriculum. Assessments provided by the teacher of the curriculum and students-organized event participants were analyzed together with the survey responses, yielding the following results:

- 1) Generally, the university students were satisfied by the design of the practice-oriented lessons, and impressed by the intergenerational communication promoted by those lessons.
- 2) University students earning a particular letter grade shared specific characteristics: “A students” had good grades and were ambitious with regard to volunteer activities in the future. “B students” were highly interested in children, but tended to be passive and not enthusiastic about talking with children. “C students” were proactive in communicating, but showed little positive attitude with regard to volunteer activities outside class.
- 3) The “Children’s Physical Play” encompassed many kinds of dynamic motions for elementary school students in lower grades.
- 4) Considering most university students’ opinions, the practice-oriented curriculum provided them various competencies, each at their respective levels of performance.

**Key Words:** “Children’s Physical Play,” intergenerational communication, regional collaboration, elementary school students

## 1. はじめに

今日の大学教育においては、従来行われている一般教育、専門教育、職業教育に加え汎用的コンピテンスを育成する教育等が推奨され、現場ではアクティブ・ラーニング化した授業の導入によりコンピテンスー関連能力獲得の実践的効果が示されてきている（渡部ほか、2015：34）。このことから、学生は座学形式での講義と比較して実践型授業においては、学科目の理論のみならずより多くのコンピテンスを学ぶことが可能となることが推測される。本研究の目的は、大学生と小学生による「体育あそび」を通じた地域連携を実践し、参加学生の意識調査を元に大学教育における多世代間コミュニケーション活動の可能性を探ることとした。

2013年度以降文部科学省の公共事業である「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」として地域の連

携的教育や研究が開始され、地域連携を用いた大学生と小学生の活動による実践例が多く報告されてきた。小学校3年生と教職課程履修学生とのフィールドワークを用いた共同授業（富士原ほか、2014：45-55）や、大学生が小学校に赴いて実際に授業運営やコンテンツの作成のサポートを行う（田部ほか、2013：63-72）などの実践成功例が報告されている。その効果としては、学生が子どもの教育の役割を担うことで、学生は地域社会と密接な関わりを持つ機会を得る（山田、2015：38）ことができ、また他者と協同的に実践することを通じて、一人ひとりの自分らしさを発揮し、知を分かち合っていくところに人間の知の営みの本質があることへの認識が高まると言われている（芦葉、1998：22）。これらのことから多世代間で連携・コミュニケーションをとることは、学生自身のコミュニケーション力、アイデンティティの獲得や他者理解能力等を向上させる可能性があると考えられる。つまり上記のような大学生と小学生が相互に関わる実践型の授業内容を取り入れることによって、大学は知的財産を社会貢献として地域に還元し、同時に学生に対してはコンピテンス向上を目標とした教育内容を提供することが可能になると考えられる。

近年、情報化社会によりデジタルコンテンツが普及し、2013年内閣府が行った若者の意識調査によると日本における携帯ゲーム機器の普及率は44.8%とアメリカや韓国等の他国と比較してトップであった（内閣府、2013：181）。年々デジタルコンテンツの普及率は上昇傾向にあるが、それと対照的に子どもが外で遊ぶ時間数は減少し、近年の子どもの遊び空間は戸外から室内へと確実に移行していると報告されている（浅見ほか、2015：103-104）。文部科学省が行った体力・運動能力調査結果によると、現在の小学生の体力は昭和60年頃と比較すると依然低い水準にあり社会問題と言われている（文部科学省、2013：1）。スキヤモンの発育発達曲線より身体の諸機能の発育は乳幼児期から学童期に著しい成長がみられ、小学生期では身体を使った「体育あそび」が身体諸機能の発達に有効であると推測される。尚、今回は「体育あそび」を“身体活動を伴う子どもの遊び（森下ほか、2012：195-196）”かつ“個々の運動のみならず一連の運動遊びの形態を含む（池田、2015：9）”と定義した。具体的には子どもが「体育あそび」を取り入れることで、集団の中で自分のからだをきたえる、からだを知る、自我意識をそだてる、ルールやきまりを学ぶ、グループ意識をそだてグループ活動をたかめる等の多様な効果が促進される（森下ほか、2012：1）と言われている。その他にも、周囲の幼児に刺激を受けながら遊びを広げることで、多様な動作を経験できる可能性が示唆されている（及川、2014：44）。以上より「体育あそび」の重要性を考慮した上で、今回 T 大学の実践型授業「プロジェクト実践 C」（日本全国に拠点を有する総合大学である T 大学の特徴を活かした地域と大学の連携的教育の一環。大学1年生から4年生までを対象としたボランティア、地域貢献を目標とした選択授業）に「体育あそび」を取り入れるに至った。

## 2. 方法

### 2.1 授業の流れおよび調査方法

2015年度自由選択科目「プロジェクト実践 C」の受講生には、小学生低学年を対象とした「体育あそび」に関するイベントを学生自らに企画・運営させた（5月開催：バランスボール、6月開催：「体育あそび」えんにち、7月開催：水遊び、図1参照）。授業を実施した期間は2015年4月から7月の4ヶ月間であった。「体育あそび」イベントの企画を行う前に、受講生には事前学習として大学地域の児童館等を訪問させ、実際に子どもと遊びを通して子どもとコミュニケーションを取る機会を2回設けた（児童館訪問実習：4月から5月上旬、各回90分）。さらに各イベントの間には、1回ずつ大学内学童施設を訪問させ（各回45分）、全授業期間内に合計4回（児童館訪問および大学内学童施設訪問）体験実習を行った。受講生にはこの体験実習を通して、子どもの身体活動レベル（遊びの種目、遊び方等）や身体的特徴（指の大きさ、手足や頭の大き

さ・比率、身体の柔軟性等)等を学ばせた。各イベント実施にあたって、学生たちは3週間前から企画を開始し、児童館スタッフと3回に渡りイベント内容の検討を行った上で本番のイベント実施に至った。

各イベント当日の主な流れは、以下の通りであった。①大学生集合 (15:00)、②ミーティング (イベント内容の最終確認)、③子どもの学童施設への送迎 (案内係)、イベントの準備 (各係ごとの作業)、④子どもと合流・イベント開始 (15:30)、⑤イベント終了 (16:30)、⑥小学生と教職員を対象とした感想調査、⑦子どもの学童施設への送迎・片付け、⑧集合、ミーティング、⑨解散。尚、“バランスボール”と“「体育あそび」えんにち”(実施した種目はストラックアウト、輪投げ、ボーリング、射的、スタンプラリー、卓球、間違い探し)はT大学アリーナで実施し、“水遊び”は屋外テラスで実施した。

各イベント実習終了後、学生に報告書を作成させた。全ての授業内実習を終えた後には、総括として「体育あそび」実習の主観的意識に関する質問紙調査(活動後意識調査)を行った。受講者21名(男子11名、女子10名)中100%の有効解答を得た。調査は集合調査法で行った。また、イベント(「体育あそび」えんにち)に参加した子ども(47名)と教職員(17名)にも簡単な感想調査を実施した。調査は集合調査法で行った。子どもへ実施した調査用紙を図2、教職員へ実施した調査用紙を図3に示した。



バランスボール

「体育あそび」えんにち(例:ストラックアウト)

水遊び

図1 「体育あそび」実習イベントを通した大学生と小学生の連携例

おつかれさまでした!

たのしかったかな? ★をぬってみよう!

1

★

ざんねん

2

★

まあまあ

3

★

いいね!

ひとつと どうぞ!

\_\_\_\_\_

図2 子どもへ実施した感想調査用紙

イベントアンケート : 数字に○を付けてください。

1. 学生の対応はよかったですか?
 

5.とてもよかった	4.少しよかった	3.普通	2.あまりよくなかった	1.悪かった
-----------	----------	------	-------------	--------
2. 対応に笑顔はありましたか?
 

5.とてもよかった	4.少しよかった	3.普通	2.あまりよくなかった	1.悪かった
-----------	----------	------	-------------	--------
3. 企画力はありましたか?
 

5.とてもよかった	4.少しよかった	3.普通	2.あまりよくなかった	1.悪かった
-----------	----------	------	-------------	--------

ひとつと どうぞ!

\_\_\_\_\_

ありがとうございました!

図3 教職員へ実施した感想調査用紙

## 2.2 質問項目

今回使用した受講生の活動後意識調査の項目設定に際しては、学生が作成した報告書(イベント実習および児童館訪問実習後)及び大学生と幼児の合同授業に関する報告(知念、2006:277)を参考に作成した。設問カテゴリーは、①「子どもとのコミュニケーションについて」、②「子どもの身体的・行動等の特性について」、③「児童館について」、④「子どもへの興味・関心について」、⑤「実習を通じた学生の心理的変化について」の5つとした。具体的な個人情報及び質問項目は以下の通りとした。(Q1)学年、(Q2)氏名、(Q3)性別、(Q4)子どもたちと一緒に遊ぶことができる、(Q5)児童館での活動やイベント等で子どもたちのサポートをすることができる、(Q6)全体の状況を把握して子どもたちと一緒に遊ぶことができ

る、(Q7) 子どもに安心感を与え、一緒に遊ぶことができる、(Q8) 子どもたちに自分から話しかけることができる、(Q9) 子どもとの対話を共に楽しむことができる、(Q10) 子どもの身体的特徴(手足や頭の大きさ、背の高さ等)がわかる、(Q11) 子どもの行動特性(一つのことに夢中になる、突発的な行動等)がわかる、(Q12) 子どもの個性(自己主張が強い、おとなしい等)に関わらずコミュニケーションがとれる、(Q13) 子どもの発言や行動を予測して適切な行動をとることができる、(Q14) 児童館がどのような施設か理解している、(Q15) 児童館の職員の役割について理解している、(Q16) 児童館での子どもたちの日常的な活動・行動を理解している、(Q17) 子どもとの関わりに興味がある、(Q18) 子どもと仲良くなりたいと思う、(Q19) 子どもに楽しんでもらいたいと思う、(Q20) 企画内容の考案、スケジュール等を把握して活動することができる、(Q21) 大学生同士、連携をとりながら企画・活動することができる、(Q22) 今後も類似した実習内容の授業等があれば、受講を希望しますか、(Q23) 今後も地域や大学等において同様なボランティア活動があれば、参加を希望しますか、(Q24) 今回の実習を通して自分が成長したと思いますか、(Q25) 今後の実習内容等への提案・意見・要望・気づいた点。Q1からQ21は選択記述式、Q22からQ25は選択式と自由記述とした。またカテゴリー①(Q4~Q9)、カテゴリー②(Q10~Q13)、カテゴリー③(Q14~Q16)、カテゴリー④(Q17~Q19)、カテゴリー⑤(Q20~Q24)を全て5件法で行った。今回は学生の主観的意識に関する設問を中心に調査を行った。

活動後意識調査の回答に際して、学生にはあらかじめ質問紙調査実施の目的を説明し、調査参加同意書にチェックを得た上で回答を記述させた(T大学「人を対象とする研究倫理委員会」承認済み:15100)。尚同意書には、質問紙の回答内容によって単位の取得や成績上不利益な扱いを受ける事はないと明記した。

## 2.3 手続きおよび分析

調査は、2015年度授業「プロジェクト実践C」の第15回授業終了時に質問紙調査を実施し、Microsoft Excel 2013 for Windows を使用して単純集計を行った。表1の項目に関してはt検定を用い(両側、対応なし)、有意水準5%未満で検討した。

今回はデータ数が少ないことから、表1以外の項目に関しては単純集計にとどめ、小学生との連携活動を通した学生の意識の大まかな傾向について捉えた。また活動の様子をビデオカメラで撮影し、活動中の子どもの運動動作出現に関する観察を行い、参加学生の実習報告と共に意識調査を考察する際の参考資料とした。客観的評価の指標として、イベント実習参加者の感想や担当教員の成績評価等を用いた。

## 3. 結果および考察

### 3.1 参加学生の基本情報

質問項目 Q1 (学年)、Q3 (性別) の結果、参加学生の所属学年は2年生:4.8% (1名)、3年生:71.4% (15名)、4年生:23.8% (5名)であった。性別の構成は男子52.4% (11名)、女子47.6% (10名)であった。受講者数にはほぼ男女差はなく、男女同様に実習内容に興味を持ったと考えられる。

### 3.2 子どもとのコミュニケーションについて

図4に「小学生とのコミュニケーションについて」に関する質問項目(Q4~Q9)の集計結果を示した。80%以上の学生が全項目において「できる」または「少しできる」と回答した。Q7「安心感」に関しては、「できる」と回答した学生が1割以下(9.5%)と非常に少ない結果であった(他の設問では30%以上)。学生は子どもに対して「話しかけ」たり、一緒に「遊ぶ」ことはできても、実際に子どもに「安心感」を与えら

れていたか、という子どもの内面に関する判断は困難であり、結果として「少しできる」が7割以上を示したと考えられる。

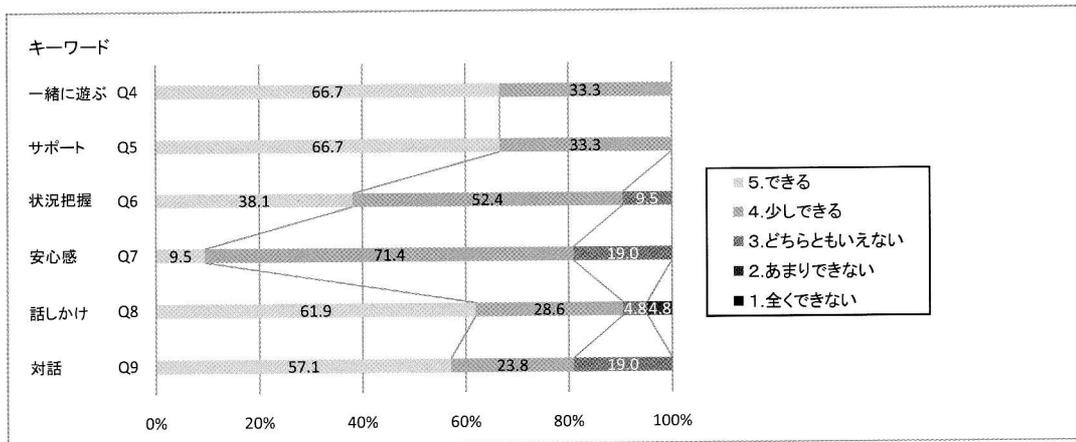


図4 小学生とのコミュニケーションについて

### 3.3 子どもの身体的・行動等の特性について

図5に「子どもの身体的・行動等の特性について」の質問項目（Q10～Q13）の集計結果を示した。Q11では100%の学生が小学生の「行動特性を理解している」と回答した。このことから、学生が子どもとの遊びを通してコミュニケーションをとることは、子どもの「行動特性」の理解に有効であったと思われる。一方で「行動を予測」し適切な対応を取ることが「できる」または「少しできる」と回答した学生は71.4%であった。これは「行動特性」を理解できてもその場に応じた子どもの行動を予測し、適切な行動を実践することは難しいからではないかと推測される。

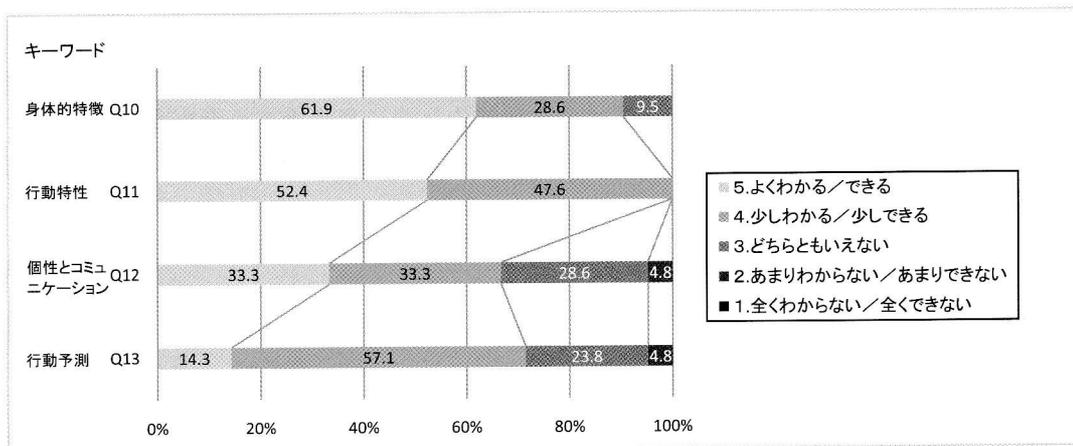


図5 子どもの身体的・行動等の特性について

### 3.4 児童館について

図6に「児童館について」の質問項目（Q14～Q16）の集計結果を示した。全ての設問に対し「よく理解できている／よくわかる」、または「少し理解できる／少しわかる」と回答した学生が90%以上であった。この結果から児童館訪問実習を通して児童館への「施設理解」、「職員の役割」、「子どもの日常的な活動」等を理解できたことが伺える。

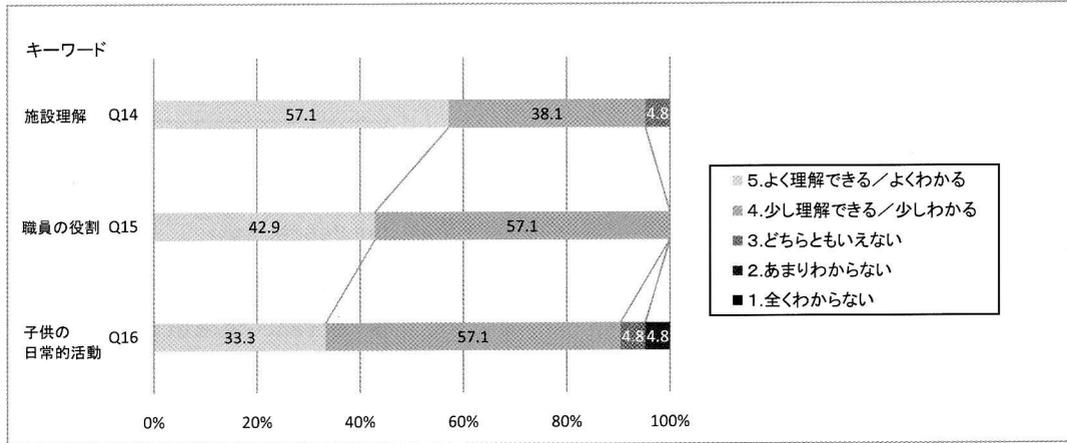


図6 児童館について

### 3.5 子どもへの興味・関心について

図7に「子どもへの興味・関心について」の質問項目（Q17～Q19）の集計結果を示した。全ての設問に対し、「とても興味がある／とても思う」または「興味がある／少し思う」と回答した学生が90%以上であった。この結果からほとんどの学生が小学生に興味関心があり、小学生と「仲良くなり」「楽しんでほしい」と感じていることが伺えた。

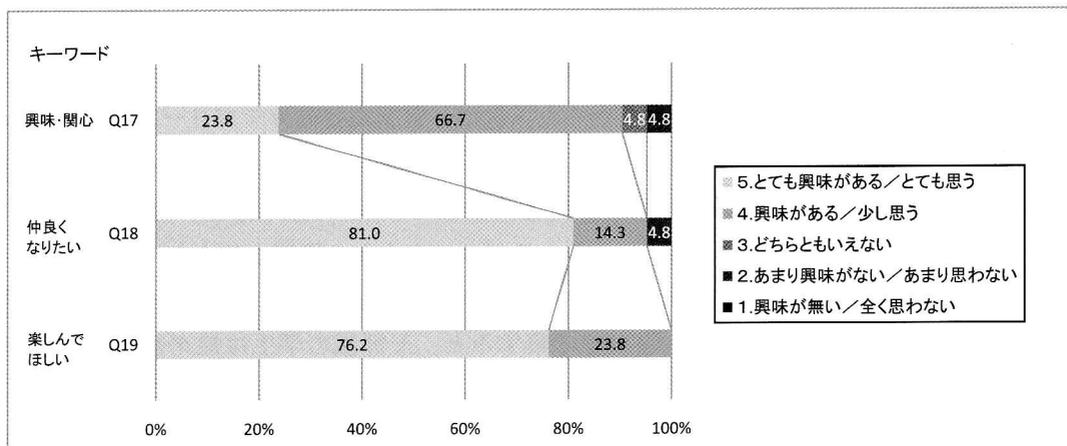


図7 子どもへの興味・関心について

### 3.6 実習を通じた学生の心理的变化について

図8に「実習を通じた学生の心理的变化について」の質問項目（Q20～Q24）の集計結果を示した。全質問項目においてに9割程度の学生が「5」および「4」の評価を行い、Q24では全ての学生が「自己の成長につながったと思う」と回答した。本実習は子どもとの連携を通して、学生にプラスの活動意識を持たせる可能性があるかと推測される。

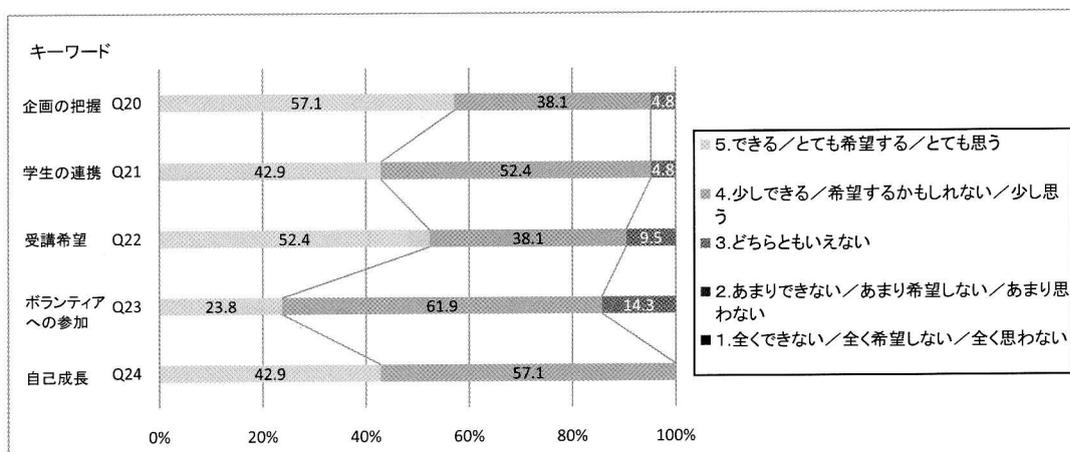


図8 実習を通じた学生の心理的变化について

### 3.7 教員による客観的評価と学生の主観的評価について

学生の実習達成度を客観的に評価するために、担当教員は100点を上限に各学生を採点した（内訳は実習態度40%、出席状況20%、レポート内容40%）。このように評価された成績上位者から順に、7名ずつ3つグループに分類した（上位1/3をA評価、中間1/3をB評価、下位1/3をC評価）。これに基づき、質問紙調査の全項目に対する学生の自己評価点の度数分布を図9に示した。A評価グループの学生は「5」の回答が最も多く、全体的傾向としても「5」や「4」と高く自己評価する学生が多かった。

各評価グループの平均点と標準偏差を表1、質問カテゴリーごとの各評価の平均点と標準偏差を表2に示した。平均点は4.48とA評価の学生が最も高く、標準偏差ではC評価の学生が低い結果となった。尚、各グループ間における平均値に有意差は見られなかった。次に、質問項目のカテゴリーに着目してみると、A評価の学生の平均点が最も高いカテゴリーは3項目あり（「子どもの身体的・行動等の特性について」「児童館について」「実習を通じた学生の心理的变化」）、C評価の学生は4項目で標準偏差が最も低い結果となった。他グループと比較してA評価の平均点が高い3つのカテゴリーの中から顕著な例としてQ12（個性とコミュニケーション）、Q14（施設理解）、Q23（ボランティアへの参加）をとりあげ、平均点と標準偏差を表3に示した。実習後の学生報告書の記載内容も含めて考察すると、A評価の学生は他グループと比較して、次の点で優れていると推測された。Q12（ $4.43 \pm 0.79$ ）では「子どもの様々な個性をよく理解し、適切にコミュニケーションをとることができることを実感していた」。Q14（ $4.86 \pm 0.38$ ）では「児童館の活動等に対する理解がある」、Q23（ $4.29 \pm 0.76$ ）では「自主的に今後もボランティア活動に参加したいと考えている」等であった。これらから、A評価の学生は初対面の子どもに対しても適切にコミュニケーションをとることができ、結果として状況把握能力や対応能力に優れていたと考えられる。また、今回の実習以外に行われている地域等のボランティア活動への参加にも、意欲的であることが伺えた。A評価の学生の中には既にボランティア経験があり、本実習と同様な活動を頻繁に行っている学生が3名いた。これらの学生は、ボランティア初心者の学生より自己評価点を低くつける傾向が見られ、質問項目によってはA評価グループにおける標準偏差はC評価の学生より上回る結果になったと考えられる。

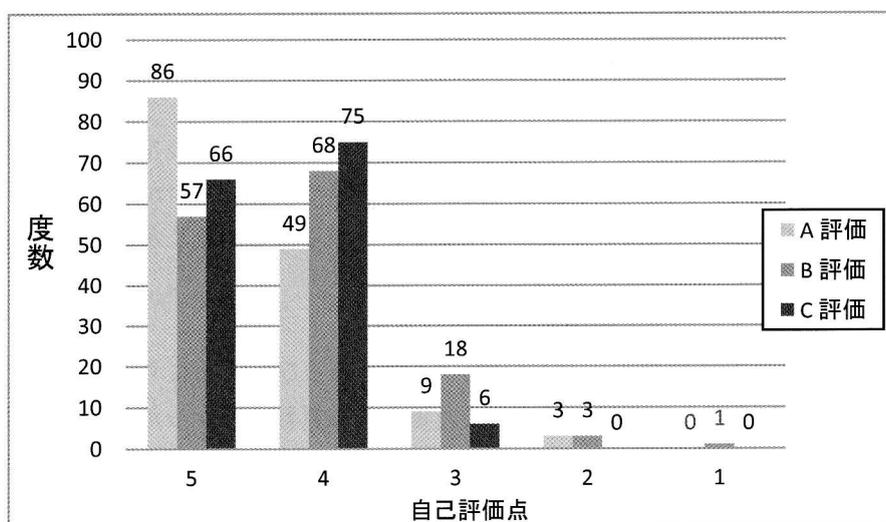


図9 学生の自己評価点の度数分布

(質問紙調査全項目に対応、上位1/3を A 評価、中間1/3を B 評価、下位1/3を C 評価)

表1 全質問項目における各グループの傾向 (平均点と標準偏差)

評価	平均点・標準偏差
A	4.48±0.71
B	4.21±0.78
C	4.40±0.57

表2 質問カテゴリーにおける各グループの傾向 (平均点と標準偏差)

評価	コミュニケーション 平均点・標準偏差	身体的・行動特性 平均点・標準偏差	児童館 平均点・標準偏差	興味・関心 平均点・標準偏差	心的変化 平均点・標準偏差
A	4.52±0.63	4.36±0.87	4.67±0.48	4.48±0.93	4.43±0.61
B	4.12±0.77	4.04±0.84	4.00±1.00	4.67±0.58	4.29±0.62
C	4.55±0.55	4.21±0.63	4.38±0.50	4.43±0.51	4.40±0.60

表3 A 評価の学生が高得点を示した質問項目の例 (平均点と標準偏差)

評価	Q12 個性とコミュニケーション 平均点・標準偏差	Q14 施設理解 平均点・標準偏差	Q23 ボランティアへの参加 平均点・標準偏差
A	4.43±0.79	4.86±0.38	4.29±0.76
B	3.43±1.13	4.14±1.07	4.14±0.69
C	4.00±0.58	4.43±0.53	3.86±0.38

### 3.8 客観的評価と主観的評価の関連について

表2「質問カテゴリーにおける各評価グループの傾向」の結果、「子どもとのコミュニケーション」と「子どもへの興味・関心」においては A 評価グループ以外の平均点が最も高い傾向が見られた。その顕著な例 Q4 (一緒に遊ぶことができる)、Q8 (自分から話かけることができる) では、C 評価の学生が最も高い平均点 (4.86) を示した。C 評価の学生は「子どもと一緒に楽しくしたい」「積極的に子どもとコミュ

ニケーションを取りたい」等の気持ちが強い一方で、今後のボランティア参加については、最も点数が低く示されていた（Q23：3.86）。つまり授業外で行われるボランティア活動には、あまり意欲的ではないことが分かった。

Q17（子どもとの関わりに興味がある）では、B評価の学生が最も平均点が高かった（ $4.29 \pm 0.76$ ）。実習後報告書の内容を考慮すると、B評価の学生は小学生との関わりに興味や関心は高いが、消極的な性格の学生が多かったため、初対面の子ども達と適切にコミュニケーションを取ることが難しかったと推測される。

### 3.9 イベント実習「「体育あそび」えんにち」参加者の感想について

今回の授業で学生が主催したイベント実習の一つとして、「「体育あそび」えんにち」がある。このイベントでは他のイベントよりも参加した子どもの数が多く、また参加教職員数も多かったため、客観的評価を得るのには良い機会と判断し、今回は「「体育あそび」えんにち」をイベントの典型例として選択し、考察を行った。

「「体育あそび」えんにち」の参加者（子ども：47名）を対象に、簡単な感想調査を行った。集計結果を図10（選択式）、図11（自由記述式）に示した。約7割の子どもは「「体育あそび」えんにち」について「いいね！」と回答し、自由記述式感想によると約7割の子どもが「楽しかった」「またやりたい」等イベントへの好感が述べられていた。また「おにいさん・おねえさんたち」といった単語が多く使われており、「大学生との交流」が印象に残ったという感想も得られた。このことから「「体育あそび」えんにち」では、大学生と子どもにおける多世代間コミュニケーションが、適切に行われていたと推測される。

参加した教職員（17名）にも感想調査を行った結果、全ての問に対して「とてもよかった」「少しよかった」の回答の割合は75%以上であり、高評価が得られた。自由記述では「企画の準備不足」を3名に指摘されたが、参加教職員の客観的評価から学生の実習態度、子どもに対する接し方にはほぼ問題はなく、企画したイベント内容・運営等は子どもに向けて適切であった事が示された。

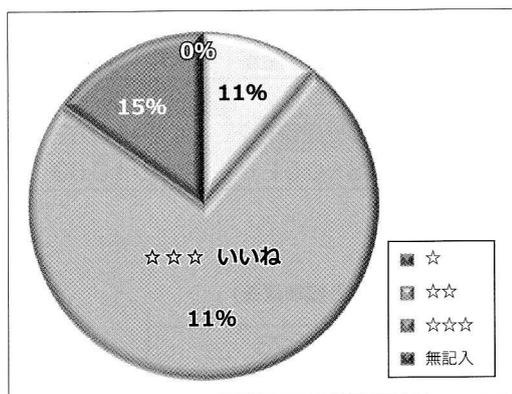


図10 子どもの感想の集計結果（選択式）

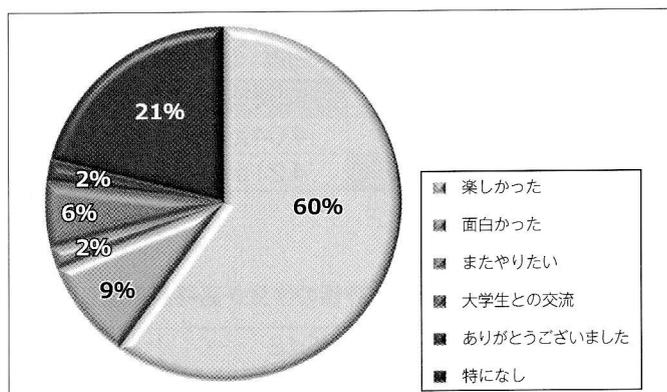


図11 子どもの感想の集計結果（自由記述式）

### 3.10 イベント実習「「体育あそび」えんにち」後の学生の感想について

「「体育あそび」えんにち」実習後の学生の報告書を元に意見・感想を集計した結果、報告事項「①活動内容」に関しては、半数以上の学生が「スケジュールの詳細」について、十分に把握していた。多くの学生が、イベントを企画・運営する立場としての責任感を強く感じていたと考えられる。次に「②子どもの性格・行動の特徴」に関する記述では、「行動が予測しづらい」「様々な性格の子がいる」等の回答が、半数以上見られた。学生は子どもの行動を観察し、それに対応しながらイベントの運営を行っていたことが伺えた。「③自分が子どもにかけた言葉（行動）とそれに対する反応・効果」では、「子どもに対して注意喚起の声掛け」

に関する記載が最も多かった。イベントの円滑な運営や、子どもへの配慮から「ふざけて遊んでいる時にしっかり注意してあげると素直に受け止めてくれた」等の声掛けが多くなったと伺える。「④集団の中での自分の役割」に関しては、自分の「担当作業の運営」に関する回答がほぼ全員から得られ、自分の運営上の役割に積極的に参加していたと考えられる。「⑤企画・イベント実施内容の反省」に関しては、「企画段階において準備不足だった」等のイベントの準備段階で状況を的確に予測し、段取りを詳細に行う必要性を実感したことが伺えた。また、「学生同士のコミュニケーションを良くする」といった意見や集団作業を遂行するにあたって、学生同士で連携をとり合いイベントの運営をより円滑にする必要性を指摘する意見もあった。

### 3.11 実習を通しての自己成長について

質問項目「今回の実習を通して自分は成長したと思うか」の回答を担当教員による客観的指標（成績評価グループ）ごとに分析した結果、ABCすべての評価グループにおいて平均点が4点以上（A評価：4.57±0.53、B評価：4.14±0.38、C評価：4.57±0.53）となり、総じて学生は「体育あそび」の実習を通して、自己成長を感じた可能性があると推測される。

## 4. 今後の展望

河井らによれば、サービス・ラーニング型教育や経験学習型教育の実践における重要なポイントの一つは、その活動にどれだけ深く関わることができるか、であるという（河井ほか、2013：426）。今回の「体育あそび」実践では、小学生を対象としたイベントを学生自らが企画した。学生同士が互いに連携してイベントの運営に主体的に関わることによって、学生は通常の学内授業時よりも意欲的に深く学習に関わることができたと考えられる。学生は実習準備や実習時には「思考力」や「アイデンティティの獲得」が強化され、実習終了後にイベントで発生した問題点や反省点を報告書としてまとめることによって「探求力」の向上につながったと推測される。尚今回の「体育あそび」実践では、小学生（低学年）を対象とした。この時期は、多種多様な身体運動を体験することによって、基本的な動作が形成され、生涯につながる運動の発達・向上が進む時期（蔵田ほか、1997:116）といわれている。つまりこの時期に基本的動作を習得しなければ、今後のスポーツ技能の習得・発達に及ぼす影響は大きく、重要な時期であると言えよう。この年代の基本的運動技能には38の動作が相当し、それぞれ平衡系、移動系、操作系の3つに分類される（神奈川県立体育センター、2008:4）。今回の「体育あそび」では、意識的に基礎運動技能を取り入れることは考慮せずに、イベント内容の企画を行った。イベント終了後に子どもの活動をビデオ映像から分析をした結果、すべての運動カテゴリーに関連し、38動作のうち92.1%以上（35動作）が実施されていることが明らかになった。然るに運動の観点から見ても、参加者の子どもに対して貴重なコンテンツを提供することができたと考えられる。一方で、本研究では記名式で学生へ対する調査が行われていることに研究の限界が存在すると思われる。今回、質問紙を用いて学生の意識調査を行うにあたり、事前に同意書を用いて“回答の内容によって単位の修得や成績上不利益を受けることはない”という点について確認を行った。しかしながら、授業内で記名式の調査が行われる場合には、学生は成績評価に関わる可能性を意識して自分自身をより素晴らしく見せようとする可能性は否めない。今後検討の余地があるといえよう。また、今回の調査では回答学生数が限られていたため、学生の活動意識に関して大まかな傾向のみを報告した。今後も「体育あそび」を用いた地域連携活動を継続・発展させるためには、大学生のみならず小学生にも焦点を当てたアプローチが必要となってくると考えられる。また、二者間のコミュニケーション等を探る為には、今回よりも少人数の単位でのやり取りを詳細に観察することが必要であろう。今回の「体育あそび」を用いた多世代間コミュニケーションに

において、学生は多くの汎用性コンピテンスを学ぶ貴重な機会となる可能性が示されたが、今後は観察的方法を用いた追従的調査を行って更なる検討が必要と考えられる。

## 5. まとめ

本研究は、地域連携を取り入れた実践型授業（「体育あそび」を用いた多世代間コミュニケーション）を実施し、今後の活動の基礎資料を得るために学生の主観的な意識調査を行った。客観的指標として担当教員及び学生主催イベントへの参加者の評価を取り入れて考察した結果、以下の内容が得られた。

- 1) 総じて学生は実習内容に満足しており、多世代間コミュニケーションを取り入れた実践型授業に好印象を得ていた。
- 2) 担当教員の客観的評価と学生の主観的評価を照らし合わせると、学生の成績別グループ特性が表れた。A評価グループの学生は成績もよく、今後のボランティア活動に意欲的であった。B評価グループでは子どもに興味関心は高いが消極的な学生が多い傾向が示された。C評価グループの学生はコミュニケーションをとることへの意欲は高いが、授業以外のボランティア活動にはやや消極的な傾向が示された。
- 3) 小学校低学年の子どもに対し、「体育あそび」実習では多様な運動動作を実施することができた。
- 4) 今回の実習では、すべての学生が各個人の能力レベルにおいて多くのコンピテンスを学ぶことができるという意見が得られた。

## 引用文献

- 浅見俊雄, 福永哲夫, 2015, 『子どもの遊び・運動・スポーツ』, 市村出版: 東京, 103-104.
- 芦葉浪久, 1998, 「社会情報学部の在り方と方向性」, 『教育情報研究』, 14: 15-23.
- 富士原雅弘, 清水大貴, 平木隆之, 2014, 「パブリックアチーブメント型教育の可能性—東海大学清水キャンパスにおける小大連携の取り組み—」, 『東海大学課程資格教育センター論集』, 13: 45-55.
- 池田裕恵, 2015, 「幼児期の育ちと運動遊び指導の意義および課題」, 『子どもと発育発達』, 13(1): 9-14.
- 神奈川県立体育センター研究報告書, 「子どもの体力及び運動機能の向上に関する研究」(2年継続研究の1年次), <http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/2413.pdf>, (参照2015.9.12).
- 河井亨, 木村充, 2013, 「サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割: 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて」, 『日本教育工学論文誌』, 36(4): 426.
- 蔵田潔, 森茂美, 大島知一, 1997, 『運動制御と運動学習』, 協同医書出版社: 東京, 116-117.
- 文部科学省, 「平成25年度体力・運動能力調査結果の概念及び報告書について」, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afiedfile/2014/10/14/1352493\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2014/10/14/1352493_02.pdf), (参照2015.9.16).
- 森下はるみ, 松村康平, 2012, 『体育あそび 春夏秋冬 復刻版』, 新書館: 東京, 1-196.
- 内閣府, 「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」, [http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b4\\_1.pdf](http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b4_1.pdf), (参照2015.9.12).
- 及川直樹, 2014, 「幼児の遊びの中で発現する基本動作の実態と関連要因の検討—地域子育て支援拠点を利用する親子を対象に—」, 『発育発達研究』, 62: 44-55.
- 田部俊充, 加藤美由紀, 2013, 「小大連携による環境教育研究の取り組み—生物多様性の理解—」, 『日本女子大学紀要人間社会学部』, 24: 63-72.
- 知念嘉史, 2006, 「幼児スポーツ演習実践報告—大学生と幼児の合同授業の試み—」, 『東海大学紀要体育学部』, 36: 273-280.
- 渡部俊彦, 米澤章彦, 2015, 「教育内容の評価に基づいた授業改善と教育効果の解析—薬学部1年次・早期体験学修からの検証—」, 『大学教育と情報』, 150: 34-36.
- 山田清, 2015, 『To-Collabo プログラム成果報告書2014』, 東海大学 To-Collabo 推進室: 東京, 1-78.